超低出生体重児の学齢期における心理・行動

その 63. 動的家族画に見られる超低出生体重児の特徴

○北村真知子¹・金澤忠博²・安田純³・加藤真由子²・日野林俊彦²・南徹弘⁴・北島博之¹(非会員)・藤村正哲¹(非会員)
(¹大阪府立母子保健総合医療センター・²大阪大学大学院人間科学研究科・³美作大学生生活科学部・⁴甲子園短期大学生生活環境学科)
キーワード: 超低出生体重児・学齢期・家族画

Psychological and Behavioral Outcomes in Extremely Low Birthweight Children at School Age: Some Characteristics of Extremely Low Birthweight Children through Kinetic Family Drawings.
Machiko KITAMURA¹, Tadahiro KANAZAWA², Jun YASUDA³, Mayuko KATO², Toshihiko HINOYASHI², Tetsuhiro MINAMI⁴, Hiroyuki KITAJIMA^{1, #}, Masanori FUJIMURA^{1, #}
(¹Osaka Medical Center for Maternal and Child Health, ²Graduate School of Human Sciences, Osaka Univ., ³Mimasaka Univ., ⁴Koshien Junior College)
Key words: Extremely Low Birthweight Children, School Age, Kinetic Family Drawings.

【目的】

動的家族画(KFD)を用いて、学齢期に達した超低出生体重児の家族像と家庭内での自己イメージを分析することを目的とした。

【対象・方法】

対象児は平均 9.0 歳の超低出生体重児 101 名 (男児 42 名 女児 59 名)。出生体重は平均 731.9 g、在胎期間は平均 26.6 週であった。KFD は検査者が「あなたを含めてあなたの家族みんなが何かしているところを絵に描いてください。棒のような人は描かないでください。立っているところではなく何かしているところを描いてください。」と教示し、描き終えてから描いた順に絵に番号をつけ、それが誰でも何をしているところかを記入した。

【結果・考察】

① 描画順 初めに描かれた人物について表 1 に示す。全体としては、自分を初めに描いたものが最も多く、母親、父親と続く。描画順には家庭内の日常的序列、家庭内の相対的重要度が表れると言われているが、彼ら自身が家族の中心になっていることが示唆された。

表 1 一番初めに描かれた人物

	父	母	自分	兄姉	弟妹	同胞	祖父母
人数	14	23	27	12	8	11	6
%	13.9	22.8	26.7	11.9	7.9	10.9	5.9

同胞：双胎、品胎のきょうだい

② 大きさ 人物像の大きさ(全長)を計測し比較した。最も大きく描かれた人物を表 2 に示す。全体としてみると、最も大きく描かれた割合が高いのは母親、次いで父親(ほぼ同率)、自分であった。絵の人物の大きさはその人物に対する描き手の関心の強さ、心理的影響の大きさを表すと言われているが、彼らにとって家族内での両親の存在は重要であると言える。

表 2 一番大きく描かれた人物

	父	母	自分	兄姉	弟妹	同胞	祖父母
人数	27	28	19	12	3	7	5
%	26.7	27.7	18.8	11.9	3.0	6.9	5.0

③ 位置 人物像の頭部の先端から用紙の上端までの垂直距離を計測し、一番高い位置に描かれた人物について表 3 に示す。最も高い位置に書かれた割合が高いのは母親、次いで自分(ほぼ同率)、父親であった。高い位置に描かれるのは、家族内で優位に立ちリーダー的役割をイメージされているものであるが、彼らにとって家庭内の権力者は母親もしくは自分と捉えているのかもしれない。

表 3 一番高い位置に描かれた人物

	父	母	自分	兄姉	弟妹	同胞	祖父母
人数	17	28	27	9	6	6	8
%	16.9	27.8	26.7	8.9	5.9	5.9	7.9

④ 自己像との距離 自分と他の家族との直線最短距離を計測した。最も近くに描かれた人物の割合を示したのが表 4 である。全体としてみると、最も割合が高いのは父親であった。描画における人物間の距離は心理的な距離を表すとされているが、彼らにとって父親は親密な存在と思われる。また、対象児の中には双胎、品胎のきょうだいがいる者は 30 名であったが、そのうち 17 名(56.7%)が自己像の最も近くに同胞を描いた。誕生の時から共に育ってきたきょうだいに対する親密さは非常に高いと言える。

表 4 一番自分の近くに描かれた人物

	父	母	兄姉	弟妹	同胞	祖父母
人数	29	18	15	12	17	4
%	30.5	19.0	15.8	12.6	17.9	4.2

〔謝辞〕

この一連の共同研究は、大阪大学名誉教授で武庫川女子大学学長の糸魚川直祐先生を中心に行われてきました。また、検診の企画全般において大阪府立母子保健総合医療センターの平野慎也先生、小杉恵先生、山本悦代先生、村田雅子先生にご協力をいただきました。ここに感謝の意を表します。